

家庭生活事象に対する学習者の態度形成をねらう授業設計の試み

—グループ活動を取り入れた授業「家族と自分との関わり」の談話分析より—

鈴木 明子 平田 道憲 高橋美与子 貴志 倫子
佐藤 敦子

1. はじめに

家庭科の学習では、家族・家庭と社会との関わりについて理解し、男女が協力して家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を身に付けることが目指される。現代の高校生は、一般に生活経験が乏しく、人やモノとの関係が希薄である。教科のねらいを達成するためには、まず広範な生活事象、生活要素を自己との接点をもって主体的にとらえることが重要である。

これまでに、「家庭基礎」の生活設計の単元の学習における高校生の生活時間および家事労働に対する認識の検討に基づき、授業設計および実践を行った^{1) 2)}。授業の中で生徒が相互に意見交換する場と家事労働に関する多様な価値に触れる機会を設け、グループ活動および個人作業による記述から変容の様子を分析した。その結果、個人差はあるものの、9割以上の学習者に何らかの変容がみられ、3種の資料教材による刺激、それらの相乗効果およびグループ活動の効果が読み取れた。また、認識の深まりを促すためには、学習者同士の関わり方の工夫が課題であることが示唆された。

授業における学びの質を高める上で、直接的な影響要因となる学習指導の原理のひとつに社会化の原理がある³⁾。学校という場で集団で学ぶことによって社会性を養おうとする立場である。

また、授業は、個別学習の場合も学級全体で一斉学習を行う場合も、教師と学習者や学習者同士の相互作用やコミュニケーション過程を導入することによって学習効果が上がる。これは、多様な意見に触れることによって個の学びが深まる、あるいは個性を生かしつつ協力し共に問題解決や作品の完成を目指す際に力学的な効果を生むという形で現れる。

しかしながら学級全体で学ぶ際にこのような授業環境をつくることはきわめて難しく、工夫が必要である。

そのひとつとしてグループ学習がある。この学習によって、他者との相互作用が増し、個のアイデンティティの形成過程において他者との共有と公的承認の中で自分の役割を明確にしていくことが可能になる。社会性や共同体を強調しつつ、個の発達を促すことができる方法として、家庭科においても多数取り上げられている。

ここでは、どのような方法でグループをつくるか、グループの適正人数やメンバーの属性をどのように構成するか、グループ内のルールの取り決めなどが問題となる。実験・実習のグループ学習の条件については具体的な検討がみられる⁴⁾。一方で、一斉学習の中で数分間から10分程度の短時間でグループによる話し合いという形でグループ学習を行う場面がみられる。このような状況の中で、学習者相互にどのような会話がなされ、どのような共同体がつけられているのだろうか。また、教師がねらうグループ学習の成果はどの程度みられるのであろうか。学習内容、教材、学級集団の特徴や成熟度による影響は大きいと思われるが、その実態を把握することによって、学習者の態度形成を図る授業方略の一端がみえるのではないかと考える。

本研究では、前報²⁾で行った高等学校家庭基礎における「家族と自分との関わり—家事労働について考える—」の授業を、資料等一部変更して実践し、教師と学習者のやりとりやグループ活動による作業と会話に焦点をあて、家事労働および家族と自分との関係に関してどのような意見が出され、グループ構成員相互にどのような方法で情報交換を行い相互評価を行っているのかについて考察する。それによって、家庭生活事象に対する態度形成に至る授業を設計するための示唆を得ることを目的とする。なお、授業の談話分析とは、従来の相互作用分析と同様に教室の発話や行動を分析対象とするが、設定されたカテゴリーに当てはまる発

話や行動を集計するだけではなく、ある発話や行動が起こった物理的・社会的文脈や文化・歴史的背景を考慮して分析するものである。そのため、発話者の認知的・社会的やりとりの中にみられる関係性や価値体系の相互交渉過程を検討することも可能である⁵⁾。ここでは談話分析のための十分なデータを得ていないので手続きが不適切な面も多いが、教師による3つの資料の提示効果およびグループ活動の効果を談話から探り、授業の動的過程をとらえたい。

2. 授業の概要

授業は、高橋によって2006年5月に高等学校1年生5クラスを対象に実施された。その中の1クラス(男子26名、女子17名)を対象に、授業観察、授業全体およびグループ活動のプロトコル分析を行うとともに、グループ活動によって作成したワークシートを分析した。本時が位置づけられている単元の設定理由、全25時間の計画および本時「家事労働について考える」のねらいと学習過程を学習指導案として以下に示す。

家庭科学学習指導案

(1) 単元 人の一生と家族

(2) 単元設定の理由

現代社会は情報が氾濫しており、私たちにとって一番身近で大切な存在である家族についても多様な考え方がみられる。そのような中で青年期にある高校生にとって自らの生き方を主体的に考える力を育むことは不可欠である。しかし、生徒たちの日常生活では自分たちの家族について振り返ってみるという機会ほとんどない。また、目先のことにとらわれがちで、将来の生活を考えることは夢や空想に終わってしまい、現在の自分の生活を見つめ直すことにつながらない。

このような状況の高校生に対して、本単元では次のような学習を通して、生徒一人ひとりがどのような社会人に成長していくのか、どのような家庭を築いていくのかを考えるきっかけとしていきたい。

- ・様々なライフコースがあることに気づき、それぞれのコースにおける課題について話し合うことを通して、いろいろな人生の選択について考える。
- ・自分の生活設計を考えながら生き方への価値観を深める。
- ・家族の生活時間を記入し、家族との関わりや家事労働の偏りに気づく。
- ・現代の食生活の課題にはどんなことがあるのかを考え、家族の食生活を振り返る。
- ・調理実習を通して家族の食事を準備することができるようになる。

(3) 単元計画 (総時数25時間、ただし2)3)については年間計画の最後に位置づける。)

1) 家族と自分との関わり	21時間
家族・家庭とは	(4)
1日の過ごし方(生活時間)	(2)
家事労働を考える	(2)(本時)
食生活において	
*現代の食生活について	(3)
*実習を通して	(6)
*調理実習	(4)
2) ライフコースと生活課題	3時間
ライフサイクルとライフステージ	(1)
いろいろなライフコース	(2)
ライフコースと生活課題	
ライフステージごとの発達課題	
3) 私の人生を築く	1時間
青年期の生き方を考える	
進路選択をするに当たって	

(4) 本時の題材 家事労働について考える

(5) 本時のねらい

- 家事労働にはどんな仕事があるのかをあげていき、その多種多様性に気づく。
- 家事労働と職業労働とを比較することで家事労働の特徴をつかみ、家族の快適な生活のためには欠かせない仕事は家族への愛情を基盤にして無報酬で行われていることを理解する。
- 家事労働を社会化していくとその負担は軽減されるが、多くの弊害を引き起こすことを理解する。
- 家事労働を高校生が分担することについて話し合い、様々な考えがあることに気づく。
- 家事労働を家族で分担することの意義を資料を通して考え、自分も現在の家族の一員として、また将来家族をもったときの一員として、どのように家事を分担していきたいかを考える。

(6) 学習過程

過程	学習内容	生徒の活動	指導上の留意点・評価	分
導 入	1. 家事労働の種類	(1) 日常生活の中で自分や家族がこなしている家事にはどんなことがあるのかを発表する。 ・衣生活に関わって…管理, 手入れなど ・食生活に関わって…調理, 片付けなど ・住生活に関わって…掃除, 草取りなど ・その他…家計の管理, 育児など	・衣食住, 育児, 介護など様々な分野にわたり, かなり多くの仕事があること, 技術面でも難しいものから簡単なものまでいろいろあることに気づかせる。	10
	2. 家事労働についての課題	(2) 家事労働に関して色々な問題があることに気づき, 自分は現在および将来どのように関わっていくとよいのか, 課題意識を持つ。 ・担当者の偏り・家族の意識の甘さなど ・担当者の思いなど	・家族の生活時間の調査をしたとき家事労働時間にはかなりの偏りがあったことを思い出させる。 ・一人ひとりが自分の課題として受け止めているか。	15
展 開	3. 家事労働の特徴	(3) 職業労働と比較しながら家事労働にはどのような特徴があるのかを考える。 ・労働時間について・報酬についてなど	・家族の生活に欠かせない家事労働には何の保障も決まりもなく家族への愛情が原動力であるということに気づかせる。	15
	4. 家事労働の軽減の方法とその弊害	(4) 家事労働を軽減するにはどのような方法があるのかを理解する。 ・企業が提供するものの利用, 公共機関が提供するものの利用, 地域の人たちとの協力できること, 家族の協力や工夫でできること (5) 企業や公共機関が提供するものの利用や地域の人たちとの協力では家族の生活に色々な無理が生じてくることに気づく。 ・経済的負担の増加・生活時間に合わないなど	・家族の協力や工夫が大きなポイントになることを押さえる。	5 5
	(前時の確認) 5. 家事労働についての意識	(6) 共働きで妻一人に家事が集中している家庭の現実の様子を示している文章(資料1)を読んで以下の点について考える。 ・この家族にはどんな問題点があるのか・解決方法は何か。 (7) 家事労働について現状はどうなのか, どんな考えをもっているのかをグループごとに話し合う。 ・高校生が家事労働を分担することについてどう考えるのか。 ・高校生が家事労働をしたことで小遣いをもらうことについてどう考えるのか。 (8) 親子で調理することが, 子どもの様々な能力を開発することにとって有効性があるという内容の新聞記事(資料2)を読んで, 家事をこなすことで子どもは心身ともに成長していくことを理解する。 (9) 主夫体験をした男性の家事に対する意見が書いてある文章(資料3)を読んで, 夫婦で分担してこなすことで互いの大変さがわかり, 互いに労いや感謝の気持ちが生まれてくることを理解する。	・前時の確認をする。 ・家事労働を家族で分担することで, その他の問題点も解決できることを確認しておく。 ・様々な考えがあることに気づかせる。 ・現在自分が家事をやっていないことは自分にとって大きな損失であるとまとめる。 ・家事を担当している人への感謝の気持ちをもつこと, 表すことの大切さを押さえる。	15 15 5 5
ま と め	6. 家事労働についての意識の変化	(10) 家事労働に現在や将来どのように関わっていきたいのかを考え授業を通して家事労働に対する意識がどのような変化したかをまとめグループの中で意見交換をする。	・これから家事と前向きに主体的に関わっていくようにしているか。 ・意見交換を活発に行っているか。	20

資料1 「こんな日常どう思いますか。このルールから外れるわけにはいかない…」⁶⁾

広島市西部のマンションに住む内山良美(36)一仮名一は、会社員の夫(36)、高校1年生の長男と3人暮らしで、共働き。11月のある日、「会議の資料作りがある」夫は、午前7時に栄養ドリンクを飲んで、出勤。寝るのが遅かった長男は布団でぐずぐず。今日も朝食を食べずに登校した。良美はトーストと牛乳で済ませ、職場へ。「朝は慌ただしいから、3人が食卓にそろうことはめったにない。一緒なのは日曜日くらい。」(夫)昼、良美は会社近くの弁当屋ですき焼き弁当を購入。夫はコンビニで唐揚げ弁当とウーロン茶。どちらも五百円で釣りが来た。長男は給食。「うちよりおいしいし、みんなと食べるのが楽しい。」午後4時過ぎに帰宅した長男は、カップラーメンを食べ、スポーツ飲料のペットボトルを手に、学習塾へ急いだ。…略…良美は夜中に突然息が苦しくなり、あわてて夫が病院に運んだことがある。過呼吸症候群。「原因はストレス」と医者に言われた。時々カラオケで気晴らしする。夫は肥満気味で、会社の健康診断では「中性脂肪が多い」。長男は今年二回、朝礼時に気分が悪くなった。担任から「寝るのが遅れ、朝食が食べられない悪循環になっているのでは」と注意された。「もう少し子どもにかまってやりたい」と良美は思う。でも、家のローンは残っているし、長男の学費も必要だ。「こんな時代だから、夫も自分もいつストラされるか分からない。」という不安も。このルールからはずれるわけにはいかない。

(抜粋、登場人物の年齢等を改変)

資料2 読売新聞朝刊くらし面 「脳と調理 家族で料理大切さ訴え」⁷⁾

普段から親子で料理することが、脳にどんな効果を与えるか調べる実験を、東北大学未来科学技術共同研究センターの川島隆太教授(脳科学)と大阪ガスが、来月から始める。親子の脳を活性化させるとともに、子どもの心身の健全な育成につながることを実証し、家庭で料理することの大切さを訴えるのが狙いだ。

実験は、小学3～5年生とその親16組を一般公募し、脳の機能などを検査した後、6～8月に計10回、料理講習会に参加してもらう。同時に自宅でも週3回程度、調理し、その記録を提出してもらう。

講習期間後、再び検査し、講習前との違いをみるほか、講習を受けていない別の親子16組と比較し、脳への影響を探る。川島教授は、脳の機能向上に音読や単純計算を取り入れる活動で知られている。…略…(2006年4月8日)

資料3 「男と家事-ぼくの体験から…」⁸⁾

通算すると1年になる「主夫」体験と、何年にもおよぶ共働き体験から、ぼくははっきりと断言できる。「この世に家事ほどメンドーなものはない」と。日々、連綿と続く瑣末な労働。やっつけてもやっつけても、次から次へとわいてくる。まるで「もぐら叩き」のようなものだ。一服はあっても終わりはない。その厄介さにぼくは驚き、あきれ、ときに嫌悪さえ抱いたものだ。だから、ぼくはぼくなり、肌でわかっているつもりだ。男たちがなぜ家事労働から逃げたがるか、女たちがなぜヒステリーを起こすか、を。だれだって生活の喜びを味わいたいと思って生きている。家庭を持つばなおさらだ。だが、楽しい一家だんらんは、瑣末な家事労働の積み重ねの上に初めて成り立つ。しかも、だんらんが終われば、すぐに後片づけが待っている。「前後」の労働に純粋に喜びを感じる人が、果たして何人いるだろうか。…略…「男たちよ、家庭に帰ろう」と呼びかけるのは簡単だが、個人の意思や努力ではどうにもならない部分があるのではないか、そんなふうにも思ったりもする。自立などという大げさなものではなく、せめて自活していけるだけの物理的余裕を、社会は男たちに与えてほしい。いま、ぼくは切にそう願うのみだ。そのためには何をしなければならぬか、男たちも真剣に考えるべきときに来ているようだ。

3. 授業分析および考察

(1) 教師と生徒のかかわり

授業全体のプロトコル分析の中で、教師の発問や指

示に対して生徒からの回答や反応があった部分を取りあげて、どのようなかかわりがみられるかについて考察する。

時間経過	生徒・教師のプロトコル (Pは特定できない生徒、Tは教師)
0.24-1.08	T:おととい授業で家事労働のこと入りましたね。ちょっと家事労働について考えなくてはいけないかなあと感じ始めている人がいるんじゃないかと期待しているんですが。今日はですね、家事労働について考える材料を提供したいと思います。今日の最後には、自分なりの家事労働についての考えをまとめる、というところまでいけたらいいと思います。じゃあ、早速、この前のプリントを出してください。
1.09-3.15	…略…
3.16-3.39	T:四角のところに、「資料1」を読んで、この家族の問題点だと思うところをあげてみよう」と書いてある。ちょっとそれを頭に入れて、問題点はどこかなあということを見つけながらですね、今から読んでもらうので聞いてください。
3.39-4.05	…略…
4.06-4.15	T:H君、読んで下さい。資料1。
4.16-7.00	(H男 資料1朗読) 他の生徒 黙読
7.01-7.57	T:これは、一番下に書いてあるように新聞に載っていたノンフィクション。こういう家庭ですね、よくあることかなあと私も読みながら思ったり、いやいや、そんなことはないんじゃないかなあ、と複雑な心境なんですけど、と我が家にもあてはめながら読んでみました。じゃあ、この家族、夫婦と高校生の息子という3人の家族。さっき言ったように、この中にはいろいろ問題点が含まれていると思うが、どんな問題があるか、自分であげてください。

7. 58-10. 59 P:各自でWPに記入—静かに取り組んでいる。
11. 00-11. 11 T:まだ十分ではないと思うが、いってみてください。(指名)Nさん
11. 12-12. 00 P,N女:食事時間がばらばら、昼食や夕食をインスタントで済ませる。
(板書)資料1より インスタント食品、食事時間
12. 01-12. 24 T:はい、今Nさんが言ってくれたように、食生活のところでですね。インスタント食品を利用していたり、食事時間があっていない。朝食抜きと書いてくれている人もいませんか。
(板書)朝食抜き
12. 25-12. 37 T:外食が多かったり、いろいろですね。食生活に、ひとつ問題点がありますよね。
(板書)食生活
12. 38-12. 46 T:食生活のことをいろいろ書いてくれていると思うんですが、食生活以外のことなにかあげている人いますかね。問題点があるんじゃないかと。ちょっといたら、何か上げている人いたら、できたら手をあげてほしいんですが。
12. 47-12. 54 (指名)Tさん
12. 55-13. 15 P,T女:みんなそれぞれ協力して(照れ笑い)。えっと、家事の分担ができていない。
(板書)家事分担
13. 16-13. 30 T:そうですね。そこのところがひとつありますね、家事の分担ができていない。
(板書)できていない
13. 31-13. 59 T:食生活のことが一つと、それから家事の分担ができていない。食生活のことはずっと最後まで出てきてますね。こういうところから、いろいろ心身に影響が出てきている。
(板書)心身への影響
14. 00-14. 40 T:それから、家事の分担ができていないというところ。で、右側の…「夫は掃除洗濯を手伝う人ではないから全て私の負担、料理にかける時間はできるだけ省きたいのが本音だ」っていうそこの3行の文章がありますね。ですから分担できていない、奥さん一人がやっている。そうなる時間が無いから食生活がどうしてもおろそかになってしまう。そしたら、やっぱり家事の分担というところがキーポイント。
(板書)キーポイント
14. 41-14. 48 T:長男がちょっと早く帰って、料理を一品でも作ってみたらどうか。
14. 49-14. 49 P男:長男が?!
14. 50-16. 03 T:(苦笑)長男が。とか、だんなさんが夫が掃除洗濯をちょっとでもやる人だったらどうか、ていう、そこのところですね、そこの分担ができていたら、こっち全体の問題点のほうも十分解決していくんじゃないか、解決するかもしれない、そこのところがキーポイント、っていうことなんですね。で、家族で分担するということについて、みんなにはそれぞれ意見があると思うんですね。いろいろ、ちらちら「長男が?...」という声も聞こえましたが、で、今からですね、お互いどんな考えを持っているのか話し合ってみてほしいと思うんですね。話し合うのが、まず、ここの2人前の机に.....(グループ分け指示)
16. 04-19. 00 (グループ分け 席移動)
19. 01-20. 24 T:移動したところで注目。今、いいですかね、紙を一枚配りましたね。ありますか。ひとつ、現状について、自分は家事にどのくらい協力しているか、という現状について、それぞれ一人ずつ、自分はこういう現状ですよっていうことを言うてみる。二つ目、高校生が家事をすることについて、賛成か、反対か、なぜか。できたらそこは、グループで意見をまとめてみる。賛成か、反対か、まあ、どちらともいえないとなるかもしれません。で意見をまとめてみて欲しいんですが。三つ目、家事をしたことに対しておこづかいをもらうということ、経験があるかと思いますが、そのことについて、賛成か反対か、どうしてか。その3つのこと、えっと7分間、話し合ってください。
20. 25-26. 44 P:グループ活動
26. 45 T:では、記録をとった人に発表してもらってから、席に戻る。
26. 46-27. 19 ...略...
27. 20-27. 51 T:じゃあですね、いいですか、こっち向いて。ちょっと記録をとった人手を上げてください。いいですか。現状、自分たちで話し合ったところのメンバーでですね、現状として手伝いをしている人がいたということ、一人でもいたというグループ。
27. 52-27. 52 P:挙手
27. 53-32. 59 T:はい、おろして下さい。ぜんぜんいなかったところ、全員には聞いてない?全員には聞いてないか。じゃあ、ほとんどのメンバーがやっている。ほとんどのひとがやっていない。現状としては、さまざまですね。
T:高校生が家事を分担することについて賛成か、反対か。賛成って言うところ手を挙げて。賛成のグループ。賛成の理由を言うてみてくれる?
P女:家族の一員。 P男:大人になってから役立つ。 P女:お母さんが大変。

- T:じゃあ、反対だというところ、理由は。
P男:勉強と部活を優先したい。 P:帰宅時には家事がすべて終わっている。 P男:やればやるほど悪い方向になる。
T:やると失敗してしまうか。
T:じゃあ、最後のところ、お小遣いをもらうことについて賛成のところ。え、一つだけ？
P男:一週間千円以上ならやる。
T:賛成っていったよね。それ、賛成の理由かな。一週間千円はほしいということね。ほかに賛成のとこないですかね。じゃあ、反対のところ(指名)
P女:家事をやるのは当たり前。
T:もう一人。
P女:もらうためにやるのは嫌。
T:まだ、完全には意見出し切れてないかもしれないけれど、後また集めて見せてもらいます。で紹介できることがあつたら次のときに紹介したいと思います。現状はさまざま、どちらかというやっっていない人のほうが多いという雰囲気を受けますが。
T:それから、高校生が分担することについて、ですね、賛成か、反対かという、こういうふうな(黒板さしながら)ところですね。で、「勉強や部活を優先させたい」それでいいのかな、それだけで、人生時間をすごしていいのかな？
33. 00-34. 09 …略…
34. 10- T:はい、じゃあこういうふうな今、さまざまな家事労働に対して意見がありますが、それについて、ちょっと資料、配りますから。はい、みんなあるね。資料2のほうですけれども、これは読売新聞の記事です。2006年4月8日、つい最近、こういう記事が載ってました。
-43. 33 …略…
43. 34-45. 10 T:それからですね、やっぱり、家の中でやることのあるから、生活が規則的になっていく、まあ、みんなはどう思ってるかわかりませんが、やっぱり大人よりも、あの、学生、子供のほうが生活に時間的ゆとりはあるんですね。みんなは今、精一杯、いっぱいいっぱいと思ってるかもしれませんけれども、大人になったらもっといろいろやるが増えてくる。考えてみると、家の中の、こうなっていくか、ゆとりを持ってすごしてる時間ていうのもっとあるんじゃないかと思う。そしたらそれが無駄なこと、まあ、無駄なことになるばかりじゃないかもしれないけれども、そういうことになってしまうか、あるいは、家事をひとつでもこなして、そこで時間をとって、時間を上手に配分するようになっていくか、そういうところでやることがあるとやっぱり生活が規則的になっていくっていうこと。それからもうひとつ最後に、いろいろな体験ていうのは、いろいろな仕事があつていろんな家事をすることで、子供の好奇心が育てられる。で、意欲的になっていく。
(板書) そういう風なことがですね、子供が家事をやるってということから、いろいろな影響、子供にとってのよい影響っていうこと。
45. 11-46. 29 …略…
46. 30- T:ごめん、次ちょっと時間がないから、次資料3にいくよ。はい、資料3はですね、これはしゅふ体験、しゅふってこっこの主夫ですね。
(板書) 主夫
T:そのしゅふ体験をしたことのある人がですね、書いている家事労働に対する考え、意見なんです、ちょっとそれ、読んでもらうよ。
- 50. 00 …略…
50. 01-52. 18 T:はい、ていうふうな、しゅふ体験をした人の意見。ごめんちょっと時間だけでもうちょっとやらせて。で、その夫婦で家事を分担することについていうことになるわけですね。資料3 途中であるように、生まれてはじめて知ったと、資料にありますね。「家族の一言がどれだけ励ましになっているか」「僕は生まれて始めて知った。そんなこと女たちの気持ちを体で実感できたことが最大の収穫」やっぱりね、やってみないとわからないんです。やってみて、初めて、家事の大変さ、最初のほうに家事は大変だって書いてありますね、家事の大変さ、それからする人の大変さ、がわかるわけですね。生活時間のところでやったように、やっぱり、家事って言うのは欠かせないわけですね、家庭生活成り立っていく上で。お世話する人、される人、はっきりじゃいけない。やっぱり、する人がいて始めて成り立つわけですけれども、する人はやっぱり、される人はする人の経験をやってみないと、する人の気持ちがわからない、気持ちがわかる、そしたら相手に対する思いやりとか感謝ですね。そういうものが自然にうまれてくる。当たり前、してもらって当たり前と思ってたんじゃ、感謝の気持ちもわいてこないですけども、やってみたらすごい大変なことなんだ、それを、愛情もってやってくれてるんだと思ったら、自然に感謝の気持ちもわいてくる、そういう風に相手のことがわかるようになってくる。でやっぱり、やると、お互いのコミュニケーションも取れるわけですね。

54.00 T:次の時間にまとめの時間をとろうと思います。

終了 T:そのとき、忘れないようにもってきて下さい。

教師は、資料1を読んで内容を把握させた後、個人のワークシート作業と発表によって、資料1の状況には「食生活」と「家事分担」の問題があることを引き出した。次に「長男がちょっと早く帰って、料理を一品でも作って見たらどうか。」と提案した。ここで、ある男子生徒が、「長男が?!」と、気付きとも驚きとも解せる声をあげた。資料による客観的な問題を、生徒が自分の問題として考える機会を提供した場であった。この後、グループ活動によって生徒たちは家事分担について相互の意見に触れることになる。夫婦での家事分担のことしか考えていなかった生徒には教師の「長男が…」の言葉が刺激となって、家事分担の問題を主体的にとらえて自分の家庭生活を振り返る状況がつけられ、グループ活動に入る構えがつけられている。

グループ活動では、次の3つの観点から話し合いをすることが求められた。①現状、②高校生の家事分担に賛成か、反対かなぜか? ③家事に対して小遣いをもらうことに、賛成か反対かなぜか?である。グループ活動の実際については次節で述べる。グループ活動終了後、代表者に発表させる形で、全体の現状や意見を確認し共有する。①現状はさまざま、どちらかというやっていない人のほうが多いという雰囲気であった。②高校生が家事を分担することについて、賛成の理由は、家族の一員(女)、大人になってから役立つ(男)、お母さんが大変(女)、反対の理由、勉強と部活を優先したい(男)、帰宅時には家事がすべて終わっている(男)、やればやるほど悪い方向になる(男)などの意見が出た。男女差がみられるところをさらに深めて考えさせたかった。最後の「やればやるほど悪い方向になる」という意見に対して、教師は「やると失敗してしまうか」と返した。これに対する生徒の反応は見とれなかったが、「お母さんは何て言うの?」など、

その時の状況を考察する機会を与えることも可能であった。③お小遣いをもらうことについて、「一週間千円以上ならやる」という生徒に、教師は「賛成っていったよね。それ賛成の理由かな。一週間千円はほしいということね。」と返し、反対の理由として「家事をやるのは当たり前。もらうためにやるのは嫌。」を出させた。ここでは、労働の価値と報酬について考察を深めることができたかもしれない。教師はその後、家事を高校生が分担することについて、「反対の理由が、勉強や部活を優先させたい…から、それでいいのかな、それだけで人生時間をすごしていいのかな?」と提案している。意識としては「賛成」と言いたいが、実際は「できない」、本音は「やりたくない」と考えている生徒にも、さらに深く考えてみる機会を与えた。

その後、資料2と資料3を読み、教師が解説し、考えさせる場を設けた。資料2では「へえ。えっ、すごい。」という声も聞かれたが、時間の都合から教師が生徒の意見を引き出す場面はみられなかった。しかしながら、資料1を教材としてグループ活動を通して家事労働についての課題意識を高めていたことが、その後と与えた2つの資料の教材的価値にも影響を与えたと考える。それは、授業後の「子どもが家事を分担すること」「夫婦が家事を分担すること」の効用についての多くの記述や、「家事労働を家族みんなで分担すること」についての考えの変容や深まりからも見て取れた。

(2) グループ活動の実態

7班でグループ活動を行い、その内2班(A班、B班)については、すべての会話の直接記録とビデオ撮影を同時に行い、プロトコル作成を試みた。しかし、会話を記録されていることに気づいた生徒は、途中で筆談を始め、その詳細を把握できなかった。2班の記録できた会話と他班(C班)で拾った会話を以下に示す。

A班(男子3人、女子3人)

- M1 現状、現状。
- F3 じゃあ、現状手伝いよる人?
2人挙手
- F2 はい、現状2人。
- F3 毎日はやってない。いや、2日に一回かな?
- F2 じゃあ、週に一回は手伝ってる人?
全員挙手
- F2 あっ、じゃあ全員じゃん。毎日? (挙手) いや、やりたいなって、じゃあ、やってる人? やりたい人? やってた人でもいいや。過去一年でやってた人?

- F どれくらい家事しよる？
- M 今?! 手伝う必要ないし。
- M1 お前、寮暮らしだろ。
- M3 おー。
- F2 じゃあ、過去一年でやってた人？
- F3 あー、受験前とかは？
- F2 そりゃしょうがないな。やってた人？
6人中4人が挙手（男1人、女3人）
- F2 おおー。
- F3 それ以外2人（まったくやっていない人）。
- F2 おーイエス、高校生の家事分担、賛成の人（笑い）
全員挙手
- M1 （笑い）やりたいけど、時間帯があわないから。
- F2 えっと、賛成か反対か、なんでー？1人一個ずつたって。いってって。なんで？なんで？あー（書記）なんでー？
（ここで男子が筆談を始める）
- M え、いや、あー、いやすみません。
- F2 なんかワンパターンじゃない、今のセリフ。
- M ごめんなさい、書いていい？
- F3 ていうか、むしろここ（プリント）に直接書いてもらえば？
- F2 そりゃだめだって、汚いです。
- M えー。
- F2 書いて、はは。高校生家事分担賛成ですか？はい、賛成の人！（身を乗り出す）（書記）なぜ分担やらねば、…まあいいや。（男子の書いた意見を）読んで下さい。やっぱり汚いな。迷惑かけたくない。すごい不安になったんだけど。そうだよ。家事とかでサー、そうだよ。3番、家事をしてお小遣いをもらうことについて 賛成か反対か 賛成の人？2人？男子2人、女子1人が賛成。反対の人？

B班（男女の話し合いなし）

- M お前、家で手伝いやってるの？
- M （家事を）したことはある。
- M 米とぎしたことある。
- M ある。
- M 大体やり方わかる。
水が白くなったらいいんだろ？
- M 普通に上からこう。
- M いや逆だろ、お前やったことないだろ。
あるけどさ。
4号炊くと？
ぐちゃぐちゃになる。

C班

- M 本音で言ったら反対だけど、きれいごとを言ったら賛成かな。
- F 理由は？
- M もし大学とか言ってひとり暮らしになったら役に立つから？
-

観察したグループの活動では、A班は男女が自然に率直に話し合う雰囲気が見られた一方で、B班は男女の話し合いがみられなかった。認識と実態、さらに建前と本音が友達同士の話し合いの中では語られていた。

グループによってまとめられたワークシートの内容、①現状、②高校生が家事をすることに賛成か反対かなぜか？ ③家事に対して小遣いをもらうことについて、賛成か反対かなぜか？について、7班の記述内容を以下に示す。

	①	②	③
1班	何もしていない、時々する(休日、親不在の時)…ふろそうじ、灯油入れ、洗濯物入れ、食器洗い	賛成：一人暮らしの時は役に立つ 家族の一員、母が大変：(当然?) 反対：勉強や部活を優先、帰った時には家事が終わっている、やると悪い方向へ	反対：家事を手伝うことは当たり前のことだから
2班	言われたらやる、言われないとできない	賛成3名：家族でやった方がいい、大人になって役立つ 反対2名：学生の本分は勉強、時間をさきたくない、やればやるほど悪い方向に	反対：汚い、やる気は出るが自立はできない、金をもらってやる程でもない
3班 (A班)	手伝い…週に一度は全員、毎日1人、3日に1度3人、それ以外2人	みんな賛成：おかーさんが大変、将来のため2名、人の負担を減らすため、やらねばならぬ、迷惑をかけたくない	賛成2名：悪い気しない 反対4名：もらえない、もらうためにやるのはイヤ!!
4班	もう最悪、したことはあるけどそんなにしない、重要だけできない、なんで洗濯物があるんだろう?というような認識、ほとんどやらない	賛成(みんなの意見)：みんなが楽になるから(家族の一員だから、将来に役立つ) 反対：勉強や部活を優先すべき、帰宅するともうすべてが終わっている	賛成：もらった方がやる気が出るから、将来の為、仕事してお金をもらうことは大切だと知ることができるから 反対・中立：家事をしたら小遣いをもらいたいという考えは無い、当たり前で、やれと言われてやるものではないから
5班 (B班)	していない(少数たまにしている)	反対：勉強と部活動を優先すべき、時間があるならすべき、帰宅時には家事が既に終わっている	賛成：800円以上(一週間)から受け付ける
6班 (C班)	している人もいればしていない人もいる、ほとんどしていない	反対4割、賛成6割 したくないが、しなければならぬと思っている、家族の一員としてやるべきだ、大人になるとやらなくてはいけなくなるから	賛成0名 反対5名：家事をするのは当然のことだから、それとは別に小遣いをもらっているから
7班	少しは家事をしている	賛成：家族の一員だから	反対：家族の一員だから

班活動のプロトコルからは明らかにならなかったが、班によるワークシートの記述から、各班において率直な意見が多く出されている状況がみられた。しかしながら、班員相互のかかわりがほとんどみられなかった班や、短い時間では課題意識をもてず、クラス全体の発表をそのまま受け入れるしかなかった班も多い。

本時の課題は、社会的な側面や価値の側面を検討の範疇に含むため、グループ活動による効果を上げるためには、活動時間を十分にとるか、テーマを絞って班からの意見を採り上げ、授業形態を状況に応じて柔軟に変化させていくことが対応策として考えられる。

4. まとめにかえて

「家族と自分との関わり―家事労働について考える―」の授業を、前報²⁾の資料等を一部変更して実践し、談話分析によって授業の動的過程をとらえることを試みた。

それによって、3つの資料やグループ活動が個々の学習者の変容やクラス全体の雰囲気にもどのような影響

を及ぼしたか、また、家事労働に対する態度形成につながるような場面づくりができたかについて考察した。

各々の発話者のやりとりの中で、関係性や価値体系の相互交渉過程を詳細に検討できたわけではないが、本授業において意図した「家事労働」への認識の深まりや広がり、教師とのやりとりや生徒間相互の会話の中で、自分の本音、および友だちの本音と向き合う過程として見て取れた。また、教師による言葉の刺激、資料の意味解釈、受けとめや願いなどが、授業全体の中で学習者の認識をゆさぶる場となっていることが推察できた。学習者が教師から受ける一つひとつの刺激の強弱にかかわらず、一連の授業過程が、日常知を吟味する場を提供しているのではないと思われる。この効果をより明確なものにしていくためには、資料による情報を精選、整理して提供し、個々の認識を教師や友だちとのやりとりの中で自分なりに意味づけていくことができるような時間を確保することが重要である。

また、グループ活動のルールを吟味するとともに、

何についてどのような相互作用を期待するのか、意図をもって活動を位置付ける必要も感じた。

今後は、授業過程の中で、他者との相互作用や教材からの刺激を通して学習者個々の認識の変容をとらえ、家庭科における価値認識の検討を含む学習内容におけるグループ活動のあり方を検討したい。

引用・参考文献

- 1) 鈴木明子・平田道憲・小林京子・高橋美与子：「家庭生活事象に対する学習者の認識をふまえた授業開発に向けて—高校生の「生活時間」に対する認識の実態—」広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要 第33号, pp. 357-367, 2005. 3.
- 2) 鈴木明子・平田道憲・高橋美与子・貴志倫子：「家庭生活事象に対する学習者の認識をふまえた授業開発—家事労働に関する認識の変容を促す授業の提案—」学校教育実践学研究12巻, 2006. 3.
- 3) 中間美砂子編：『家庭科教育法—中・高等学校の授業づくり—』建帛社, 2004.
- 4) 増田久子・貴田康乃：“性格的特性を考慮したグループ学習の授業分析（第1報）—調理学習におけるグループ構成員の学習参加度—”，日本家庭科教育学会誌, 第28巻, 3号, 1985. 等
- 5) 高垣マユミ編著：『授業デザインの最前線—理論と実践をつなぐ知のコラボレーション—』北大路書房, 2005.
- 6) 西日本新聞社「食 暮らし取材班」：『食卓の向こう側1』西日本新聞社, 2004.
- 7) “くらしと家庭—脳と調理—” 読売新聞, 2006. 4月8日
- 8) 成澤壽一編：『これからの男の自立』より山下了一：「男と家事—ぼくの体験から」日本評論社, 1998.
- 9) 文部省『高等学校学習指導要領解説家庭編』開隆堂, 2000.